

平成28年度 部局自己評価報告書 (01:文学研究科)

Ⅲ 部局別評価指標(第2期中期計画取組分)

※ 評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容

※ 字数の上限:(1)~(2)合わせて7,000字以内

(1)全学の第2期中期目標・中期計画への貢献及び部局の第2期中期目標・中期計画の達成に向けた特色ある取組等の成果(㉓)**【全学第2期中期計画】**

No. 1 「本学独自の教養教育カリキュラムを編成」(部局中期計画1-1)

- ・実践宗教学寄附講座で開講している「グリーンケア論」「臨床死生学」「スピリチュアルケア論」「実践宗教学試論」「スピリチュアルケアと宗教者」「死を見つめる心と宗教」「宗教者と心のケア」を、「人文社会科学総合」「人文社会科学総合」として研究科・学部内の教養教育科目として位置づけて開講している(27年度授業概要)。
- ・新年度のオリエンテーション及びガイダンスの際、研究倫理の資料として、「研究者の作法」を学部1年生、2年生、大学院前期・後期の学生に配付し、説明を行った。
- ・人文社会科学総合・人文社会科学総合の科目として「研究と実践の倫理」を実施した(27年度授業概要)。
- ・従来の語学学習とは趣向を変え、基の論理・文化的意味と実技を学ぶ授業や、パズルを通して論理学に接近する授業(日本語と英語で別時間帯に開講)など、実用的な目的のために英語を用いる授業を開講し、英語の運用機会の拡大と学生の運用力の強化を図っている(27年度授業概要)。

No. 5 「異分野融合領域における高度な研究人材の養成を進めるための教育プログラムを実施」(部局中期計画1-2)

- ・2つの博士課程教育リーディングプログラムに文化科学・歴史科学・人間科学各専攻から多くの教員が参加し、文理融合教育を積極的に推進するプログラムの具体化を進めている。
- ・文学研究科の教員が国際高等研究教育院の融合領域研究合同講義を担当し、異分野融合的教育を実施している。

No. 6 「高度専門職業人の計画的な養成を進めるための教育プログラムを実施」(部局中期計画4-1)

- ・「実践宗教学寄附講座」では2回の「臨床宗教師」研修を実施し、臨床宗教師の育成を行った(詳細は(2)-4参照)。
- ・「実践宗教学寄附講座」における臨床宗教師研修の活動が全国に波及した結果、龍谷大学、鶴見大学、高野山大学、種智院大学、武蔵野大学、上智大学、愛知学院大学等において、臨床宗教師養成プログラムが実施されるに至った。東北大学はこのプログラムの創設主体として、また唯一の国立大学法人として、これらの諸組織の中核としての役割を期待されている。
- ・平成28年2月には各大学を横断する「日本臨床宗教師会」が設立され、文学研究科の谷山洋三准教授が事務局長に就任した(『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』9号)。

No. 9 「説明会、オープンキャンパス、移動講座などの広報活動を展開する」(部局中期計画3-1)

- ・高校からの出前授業依頼、訪問・模擬講義依頼に積極的に対応し、平成24年度は9件、25年度15件、26年度17件、27年度24件と受入れ数を増加させ、文学部の学問内容について高校生に広報する機会を持った。
- ・平成27年度には初の試みとして平成28年3月9日の宮城県の公立高校の入学試験日に、高校1・2年生対象の入試説明会・模擬授業を実施し、高評価を得た。周知期間が短く、ホームページへの掲載と県内の高校のみへの案内という限定的な広報であったが、保護者15名を含む56名が参加。静岡県・青森県・福島県など県外からも高校生13名が来学した。
- ・高大連携強化と優秀な受験生確保を目的として、平成26年度からスーパーグローバルハイスクール

(SGH) との連携を検討した。第一弾として長野県立長野高等学校と協議を進め、平成 27 年 4 月に文学研究科の教員を講師として派遣するなどの交流を開始した。今後、留学生を巻き込んだ大規模な交流活動を推進し、信越地域からの意欲ある受験生の増大を目指す。

No. 17 「キャリア支援」(部局中期計画 6-1)

- ・文学研究科が主催し、東北大学生協とタイアップして実施する「公務員試験対策講座」、「教員試験対策講座」を実施した。これらの講座の継続実施の結果、公務員への就職状況は、第 2 期中期目標期間初年度の平成 22 年度 41 名から平成 27 年度 57 名へと大幅にアップした(教授会資料)。

No. 18 「各部局・研究者の自由な発想と独創性のある研究を支援、推進」(部局中期計画 8-1)

- ・思想史・美術史・文化人類学・宗教学などの文学研究科の諸分野、工学研究科の都市・建築学専攻、学外の研究者を巻き込んだ文理融合型研究プロジェクト「空間史学研究会」は、『空間史学叢書 2 装飾の地層』(岩田書院)を刊行した。

No. 21 「東日本大震災による被災からの復興・地域再生を先導する研究を推進」(部局中期計画 12-1)

- ・東日本大震災の復興支援プロジェクト「復興アクション 100+」に、「縁側で『こんにちは』プロジェクト」「臨床宗教師養成プログラムの開発と社会実装」「東日本大震災の被災地における方言生活支援事業」「心の相談室」の 4 つが参加した。
- ・「実践宗教学寄附講座」では、臨床宗教師研修会参加者による被災地での傾聴活動などが行われた。修了者が各地で活発な被災者支援活動に携わっている(『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』8・9号)。

No. 35 「国際水準の大学や機関との国際的ネットワークに参加し、交流を推進」(部局中期計画 9-1)

- ・2015 年 10 月にフィレンツェで開催された欧州 8 カ国主要 15 大学と共同での国際シンポジウムにあわせて、本研究科を基軸とする International New Japanese Studies Network (Hasekura League 支倉リーグ)を立ち上げた。ここには、シェフィールド大学、ハンブルク大学、ハイデルベルク大学、ウィーン大学、ライデン大学、ユトレヒト大学、ヘント大学、ルーヴァン大学、パリ第 7 大学、ヴェネツィア大学、パドヴァ大学、ボローニャ大学、フィレンツェ大学、ナポリ東洋大学というヨーロッパの日本学に関する主要大学から、約 70 名の教員が参加した。
- ・1 月中旬～2 月上旬に(一財)東北多文化アカデミーと連携し、吉林大学日本学教員研修プログラムを実施し、同大学の教員 5 名を受け入れ、研修の場を提供するとともに学術交流を行った。

No. 36 「国際共同大学院プログラムの創設等の取組を進める」(部局中期計画 2-1)

- ・文系 4 部局、及び国際文化研究科、東北アジア研究センター、高等教養教育・学生支援機構と連携して、本学におけるスーパーグローバル大学創成支援の 8 番目のプログラムとすべく、「日本学国際共同大学院プログラム」の申請を行い、認可された。
- ・「知のフォーラム」と連携し、平成 26 年度に引き続き、新規事業を 1 件立ち上げ、セミナー、ワークショップなど、活発な活動を展開した。
- ・「文学研究科概要」の英語版を作成した。

No. 56 「外部資金の拡充を図るため、外部資金獲得の支援体制を強化する」(部局中期計画 17-1)

- ・科研費等の申請書類の書き方のポイントについて、審査経験のある教員を講師とした意見交換を行う講習会を、教員・専門研究員などを対象に実施した。その結果、28 年度の採択率は前年に比べて 2 ポイント上昇した。

(2)「部局ビジョン」の重点戦略・展開施策及びミッションの再定義(強み・特色・社会的役割)の実現に向けた取組等の成果(2)

【部局ビジョン】

1. 教育のグローバル化の推進 (ミッションの再定義・学部②、大学院②④、研究③)

(1)外国語の授業の増加

異文化理解と実践的コミュニケーション能力の養成のため、外国語を用いた専門授業の増加を図ってきた。平成 27 年度は、英・独・仏・伊と中国語の計 5 カ国語を用いた専門科目の授業が、学部の 31 科目(前年度と同じ)、大学院の 19 科目(前年度より 1 科目増加)で実施された。

(2)交流の拡大

ダブルディグリー制度構築を見据えた学術交流協定の締結を推進した。世話部局として、ジュネーブ大学と大学間学術交流協定を締結した。ボローニャ大学教育学部、リンショーピン大学分析社会学研究所、パドヴァ大学文・哲学部、ヤゲウォ大学国際政治学部との間に新たに部局間学術交流協定を締結した。なお、リンショーピン大学分析社会学研究所とは、行動科学の佐藤嘉倫教授が研究代表者を務める平成 28 年度開始の科学研究費(挑戦的萌芽研究)で、同研究所のヘDESTROOM 教授を海外協力者としており、早速、共同研究を展開している。

(3)「日本学」による日欧大学間ネットワーク構築に向けた取り組み

「21 世紀のシーボルト養成プログラム」(複数領域横断型日本学研修プログラム)を継続・拡充し、2015 年 10 月からはヨーロッパを中心に 13 名の留学生を受け入れた。これは前年に比べて 7 名の増加である。

(4)ダブルディグリー制度構築に向けた取り組み

モスクワ大学心理学部とのジョイントリソーススーパーバイズドディグリープログラムの実施に向けて覚書を交わした。このプログラムは平成 28 年度に開始される予定である。

(5)国際交流促進のための短期留学プログラムの増加と外部組織との連携

(一財)東北多文化アカデミーと連携した短期留学生受け入れプログラムを一層充実させ、吉林大学(16名)、南開大学(8名)、山東大学・アモイ理工学院・アモイ大学・三江学院・輔仁大学(以上計 10 名)を特別訪問研修生として受け入れた。また、研究科独自にモスクワ国立大学からも 7 名を受け入れた。冬季にも中国を中心とした短期留学生 4 名を受け入れた。

(6)外国人教員の雇用

平成 27 年 10 月より外国人教員 1 名を新たに採用した。

(7)留学生支援のための環境と制度の整備

文科系 4 研究科合同で、国際交流スペース「オアシス」を開設した。本研究科の国際交流サポート室の機能を移し、より充実した留学生に対する修学援助及び日本人学生に対する留学援助体制を整えた。

(8)留学生を対象とした諸行事の実施

中島記念国際交流財団の援助を得て、留学生を主要対象とするボランティア・スタディー・ツアー(11月7・8日)、災害対策講習会(11月19日)を開催した。

2. 人文社会科学をイノベートする分野横断型の新たな学問の創出 (ミッションの再定義・研究③)

(1)世界最高水準をめざす分野横断型の研究・教育システムの創出

学際研究重点拠点「社会にインパクトある研究」(トップダウン課題設定型)に、本研究科が関わる文理融合型の 4 プロジェクト(「心に豊かさを感じる社会の創造」「スマートエイジング」「日本学」「ヨッタスケールデータ科学」)が採用された。

(2)国文学研究資料館が応募する新学術領域研究「日本古典籍情報学の創成」(5年間・申請額 5 億 5 千万円)に、中核的拠点として、工学研究科の協力を得て参画した。今回は不採用だったが、28 年度も再度応募すべく、準備を進めている。

(3)研究の国際連携をめざす国際シンポジウム等の開催

10 月末フィレンツェ大学にて、欧州の主要 15 大学の参加を得て本研究科主催の国際シンポジウムを開催した(詳細は(1)参照)。

(4) 2015年10月に採択された学際研究重点プログラム「世界発信する国際日本学・日本語研究拠点形成」に研究科として参加し、12月に南開大学・北京大学で国際シンポジウムを開催した。

3. 文学研究科のもつ知的資源の社会への還元

(1) 市民に対する知的資源の提供

文学研究科が主催する「有備館講座」(参加者延べ201名、大崎市)、「齋理蔵の講座」(330名、丸森町)、「東北大学イブニング講座・メトロでカルチャー」(204名)に加え、各種講座、産学連携による企業研修、高校の模擬授業等に講師を派遣した。

(2) 「市民オープンキャンパス紅葉の賀」の開催

植物園と共催で市民向け公開行事「紅葉の賀」を開催し、374名の参加を得た(昨年は278名)。

(3) 市民向け公開講演会の実施

9月に奈良女子大と合同で、公開講演会「神々の時代の人の歴史-大和の視点・東北の視点」を実施し、70名の参加を得た(文学研究科ホームページ、ポスター)

(4) 「青春のエッセー」コンテストの実施

毎年秋に行う、高校生を対象とした「青春のエッセー阿部次郎記念賞」を実施した。今年度は過去最高の269点の応募があり、文学部に対する高校側の関心を高めることに貢献した。

4. 「臨床宗教師」養成プログラムの開発と社会実装

(1) 外部資金を得て、平成27年・28年度の2年間、寄附講座「実践宗教学寄附講座」を延長した。

(2) 「実践宗教学寄附講座」では、平成27年度に学外の現役宗教者を対象に2回の「臨床宗教師」研修を実施し、31人の修了者(うち女性10人)があった。修了者は全国の病院や介護施設などでその成果を活かした業務を開始している(『東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター』8号・9号)。